

## 大型ガラス温室経営について

真 鍋 雅 晴

(宮崎県総合農業試験場)

MANABE, M.

## On the Farming of Melon and Tomato Fruits in Large-scale Glass House.

宮崎県における施設園芸は、ビニールハウスが主体であるが、最近2、3のガラス温室団地が造成されそのなりゆきが注目されている。そこで門川町城屋敷温室園芸組合（組合員7戸、栽培棟5連7棟15,750㎡、総事業費195,981千円、作型メロン、トマトの周年栽培）を対象に実態調査を行なった。ここでは主要な問題点について述べる。

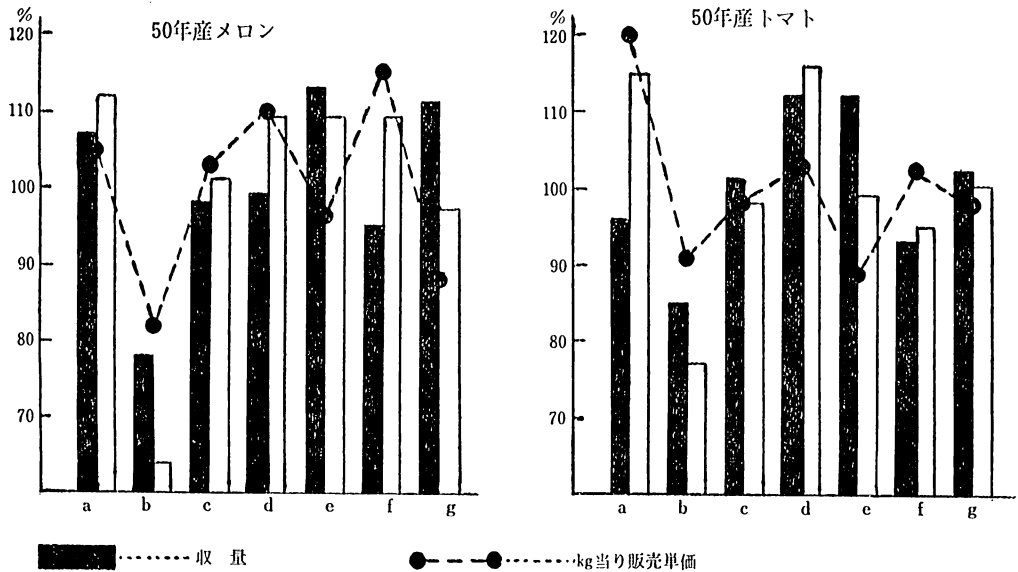
① 初年目の生産成果は図1のとおり、収量、粗収益、単価に農家間格差を生じ、第2年目のメロンでは収量、粗収益が前年より30~40%向上したものの病気の発生等で格差は一層深化した。

② 50年度ハウス部門の収益を成績の良い①④⑥農家の平均とみると、1,000㎡当り粗収益212万円、経営費146万円、農業所得66万円、農企業利潤52千円となり、1戸

当りの部門農業所得は152万円で家計費を充足し得る水準に達しなかった。

③ 高収益が得られなかったのは、マスクメロンでは、その高度な栽培技術に対する未熟さから品質を高め得なかったためであり、後作のファーストトマトでは夏期高温時における育苗技術、病害虫防除技術等が未確立で苗が不良であったり、病気が多発するなど収量、品質を低下させたことによる。

④ ハウス面積は1戸23aで均等であるが家族労働力、时期的に競合関係にある早期水稻の作付面積（54~160a）に個人差があり適期作業ができなかったことや、また事業前にタバコ、キュウリ等が作付され病虫害の面から土壌が不健全な栽培棟があるなど主体的条件の差が耕種技術に影響して農家間格差をもたらした。



%……10アール当りの平均値を100とした場合の比率で品目ごとの平均値は右のとおり。

	収量	粗収益	kg単価
	kg	千円	円
メロン(50)	2,455	619	252
メロン(51)	3,186	875	275
トマト(50)	7,038	1,295	184

図 1 メロン、トマトの生産販売状況と農家間比較

⑤ 技術が未熟なうえに協業的取り組みに乏しいため技術は閉鎖的になりがちで床土、育苗、施肥、灌水等の栽培技術に個人差が出た。

⑥ 新品目のため出荷販売技術が不慣れであった。また販売代金の精算は個別出来高精算のため出荷日のズレで販売価格に差があり収益格差の要因にもなっている。

⑦ 経営主は、平均年齢33才で各人意欲的であるが全員を統率するリーダーに欠ける。また指導者層においても新技術のため十分な対応ができず生産者—農協—指導機関相互の有機的連けいが不十分である。

以上の問題を解決するためには、次のような対策が考えられる。すなわち、⑦新品目にあった栽培技術の確立、①耐病性品種の育成、②病虫害防除技術の早期確立、③地力維持、連作障害対策を含めた経営方式の検討、④稲作を委託に出すなど稲作部門の省力化、⑤土壌消毒の徹底、客土など全棟あげての土壌条件の改善、⑥相互の意志疎通を図り技術研修の徹底、共同管理体制の導入、技術協定の強化などにより技術の高位平準化、⑦選別調製、荷造りの厳正実施、出荷先、時期、量等の出荷販売法の早期確立などである。